

2009年8月2日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：サムエル記第一 6章 13～21節

説教題：だれが聖なる神の前に立ちえよう

2014年6月29日 礼拝メッセージ

聖書：第二サムエル記 6章 12～23節

説教：いやしめられる神

1 あらすじ

ダビデがイスラエルの王となってから、その活躍はめざましいものがありました。攻めてくる敵を次々と打ち破り、エルサレムには宮殿も建てました。このようにしてから、ダビデは最後の仕上げにかかります。これまでいろいろないきさつがあつて、神の箱はアビナダブの家に置かれていました。でも、やはり神の箱は王が住むエルサレムに置かれるべきです。そこで、ダビデは早速に準備を始めます。選りすぐりの兵士三万人を集め、箱を載せる車を新しく作らせ、これを牛で引かせることにします。車とともに音楽隊や踊り手たちも続き、盛大なパレードが催されました。

ところが、ナコンの打ち場と呼ばれるところに来たとき、思わぬ事故が起きます。突然牛が暴れて神の箱をひっくり返しそうになったのです。そばにいたウザがそれを止めようととっさに手を伸ばし箱を押さえました。ところが、主の怒りはウザに対して燃え上がり、ウザはその場で死んでしまいます。折角のパレードが台無しです。いや、この事件によって、王の名誉は著しく傷つき、大スキヤンダルにさえなっています。当然ダビデは悩むことになります。

そのダビデがもう一度神の箱をエルサレ

ムに運び上げる決心をします。いったいその間、なにがあつたのか。そこから神の姿に近づきたいと願います。

2 ダビデ

1) かついで運ぶ

そのことを見ていく糸口は、神の箱の運び方にあります。一回目は、牛に引かせた新しい車を使いました。当時でいえば最高級乗用車です。しかし今度は違います。13節に「主の箱をかつぐ者たちが」とあります。もともと神の箱は、モーセの時代に作られたものです。主が示された詳しい設計図には、箱にはかつぐための棒を備えるようにときちんと書かれていました。つまり、箱はかつがなければならなかったのです。ところがダビデはこの定めを破り、勝手な思いつきで牛に運ばせてしまった。なぜそんなことをしたのか。人の手でかつぐより、高級乗用車に載せた方が格好がよいから。そうすれば王としての尊厳が増していく。つまりは、自分のプライドです。結局、ダビデの高慢の罪のために、ウザが巻きぞいになって死んでしまったのです。

計画したパレードが大失敗に終わったとき、ダビデは自分の罪に気がつき、「主の箱を、私の所にお迎えることはできない」と告白するしかありませんでした。

ところが三ヶ月してからダビデはもう一度挑戦する決心をします。普通ならどうでしょう。王の面目が丸つぶれになった事件

です。世の権力者なら、なかったことにするはずで、ところがそれほど日もたたぬうちに再挑戦する。その理由は何か。そのことはまた後で触れることにして、その前にミカルとのやりとりを見ていきます。

2) 批判するミカル

人の手ではにかつされた主の箱は、無事にエルサレムの町に入り、準備しておいた天幕の中に安置されました。ダビデは主の前で力の限り踊ります。それを見ていた妻のミカルはダビデにこんなことを言います。20節。「イスラエルの王は、きょう、ほんとうに威厳がございましたね。ごろつきが恥ずかしげもなくはだかになるように、きょう、あなたは自分の家来のはしための目の前で裸におなりになって。」

ミカルは初代イスラエル王であったサウルの娘です。由緒正しい家柄で育ったお姫様と言った方がわかりやすいでしょう。そんなミカルですから、自分の夫であり、イスラエルの王でもあるダビデがみんなの前で裸踊りをしていたというのですから、腹を立てるのは当然かもしれません。

3) 「はしためたちに敬われたい」

対してダビデはこう答えます。21節。「あなたの父よりも、その全家よりも、むしろ私を選んで主の民イスラエルの君主に任じられた主の前なのだ。私はその主の前で喜び踊るのだ。」

ダビデをイスラエルの王として選んだのは神です。その神の前でダビデが喜び踊る。自分が選ばれたことを感謝し、その喜びのあまり裸になって踊った。そんなふうにも聞かれます。でももしそうならば、「身に余る恵

みをいただいて、うれしい」ということになります。自分だけの喜びを個人的に喜んでいいだけ。

確かに最初のパレードのときはそうでした。ダビデは自分ひとりで喜んでいました。だから、わざわざ三万人の兵士を集めたり、新しく車を作らせたりもする。全部、自分だけが喜ぶためです。その結果、ウザが犠牲になってしまいました。犠牲者が出て初めてダビデは目が覚めます。何に気がついたか。それが22節の言葉です。「私はこれより、もっと卑しめられよう。私の目に卑しく見えても、あなたの言うそのはしためたちに、敬われたいのだ。」

神が見ておられるのは、ダビデではないのです。神が見ておられるのは、イスラエルの民たちです。どんな民たちでしょう。由緒正しい、立派な家柄の人たちか。そうではない。ミカルがさげすんだ貧しい人たち、卑しい人たち、はしためたち、奴隷たち、目立たない人たち、人々から無視されている人たち、弱い人たち、力のない人たち、病気の者たち、障害に苦しむ人たち、理不尽な扱いを受けて苦しんでいる人たち、罪に苦しむ人たち、そんな人たちです。

ダビデだって、王となった自分が裸になって人々の前で踊ることは、常識からはずれている、ふさわしくないとわかっています。しかし、ダビデが生きているのは、この世の常識の世界ではない、神のご覧になっている世界です。王の威厳がどうであるか、そんなことは関係がない。ダビデは自分が主の前に立たされていることを意識しています。それまではどこか足が地に着いていません。長年の苦勞の末に、王となれたことに有頂天となって、浮き足立っていました。王の威厳ばかり

を気にしていました。ただただ外側の格好を立派に取り繕うことに心を砕いていました。世の人たちの賞賛を浴びたいと思っていました。

それが、ウザが死んだことで自分の間違いに気がつきます。神ははしためと思われている人々を心に留めておられる。ならば、そのはしためたちに、敬われるような王となるのが自分に与えられた使命ではないのか。イスラエルの王とはそのようなものであることを、ダビデは学びます。

4) オベデ・エドムの家に起きたこと

それにしても不思議なのは、どうしてダビデがたった三ヶ月という短い間に、もう一度神の箱を運ぶという決心をしたのかです。先ほども言ったように、世の政治家ならば、ほとぼりが冷めるまで何もなかったふりをします。たった三ヶ月で再挑戦することはありません。

きっかけは、ガテ人オベデ・エドムの家のことです。11節。「こうして、主の箱はガテ人オベデ・エドムの家に三ヶ月とどまった。主はオベデ・エドムと彼の全家を祝福された。」

最初のパレードで事故が起きたとき、ダビデは神の箱を自分のところへ迎えることはできないと考え、一時的にオベデ・エドムの家に置くことにします。ウザが死んだことで、神の箱はわざわいをもたらすものとなってしまったからです。このままエルサレムに運び入れれば、町の人々にもわざわいが及ぶかもしれない。いやダビデ自身にも火の粉が降ってくるのではないかと恐れしました。それで、オベデ・エドムの家に回します。

皆がいやがるものをオベデ・エドムに押し

つけたのですから、考えようによっては無責任な話にも聞こえます。でもオベデ・エドムはイスラエル人ではなく、外国人です。おそらく、外国人にまではわざわいが及ぶことはないだろう。ダビデはそんなふう考えたのかもしれませんが。

結果はどうだったか。予想とはまったく別のことが起きました。外国人であるオベデ・エドムの家と彼に属する家族を主が祝福しました。ダビデが自分の間違いに気がつき、大変なことをしてしまったと悔いたこと。主はそのことを受け入れた印として、オベデ・エドムを祝福したのです。

ダビデがもう一度神の箱をエルサレムに迎える決心したのは、そんな理由があったからでした。

3 いやしめられる神

ダビデは、この事件を通して神とはどのような方であるのかを徹底的に教えられています。人の目に、はしためとさえ見えるような者の手で神の箱がかつかれていく。それが主の御心でした。そもそも神は人の手がかつかれなければどこにも行けないのですか。この世界を造られた方です。そんなことはない。人の手など借りる必要がない。なのに、神は人の手にかつかれていくことを望みます。

ダビデは言っています。「私はこれより、もっと卑しめられよう。」ダビデのことというよりも、ダビデの子孫として来られた主イエス・キリストのことを指しているとも考えられます。主はどのようにして卑しめられましたか。ミカルはダビデがはしためたちの目の前で裸になって踊っていたことに眉をひそめました。主は、裸にされて十字架につる

され、卑しめられました。十字架につるしたのは誰か。この世のはしためたちです。なぜ、主は十字架で卑しめられたのか。ダビデは言いました。「あなたの言うそのはしためたちに、敬われたいのだ。」

あのとき、誰ひとり十字架につるされた主を敬う者はいませんでした。十字架は呪われた所にしか見えませんでした。けれども後でわかりました。主があそこで吊されたのは、私たちに祝福を与えるためであった。永遠のいのちが与えられる祝福の場所であった。

この方にとって、神としての権威や栄光、威厳などどうでもよいのです。そんなことより、この世のはしため同然である私たちを心に留めたいのです。この方は、私たちのために裸にまでなろうとされる。私たちにいのちを与えるとき、なりふり構わず喜び踊る方。そんな主の姿を仰ぎ見たいと願います。